救急科の紹介

救急科は、小児救命救急センターの救急外来を担当する部門で、小児の内因性疾患から外因性疾患、軽症から集中治療を要する重症まであらゆる患者さんを24時間365日受け入れています。兵庫県下の各病院からの要請により、院内ドクターカーによるお迎え搬送のほか、緊急時にはドクターヘリや防災ヘリを利用した患者搬送も行っています。

救急外来を受診される患者の皆さんの症状は、「発熱」、「けいれん」から「けが」まで様々です。救急現場では、的確で迅速な診断が特に必要とされることから、けいれんの患者さんに対しては、外来で持続脳波モニタリングを行うことにより、非けいれん性てんかん重積発作の診断・早期の治療方針決定に役立てています。また、発熱原因の早期特定のため、グラム染色を現場で実施し、呼吸器感染症や尿路感染症の診断精度を高めています。外傷や腹痛の患者さんに対しては、エコーを日常診療として、積極的に活用しているのも当科の特徴です。

また、最近増加傾向にある外傷患者の保護者の皆さんには、家族支援・地域医療連携部とともに事故予防についてのご説明をさせていただいています。こどもの不慮の事故である、転倒・転落・熱傷・溺水・誤飲・交通事故などは、その原因があらかじめ想定できる場合も多く、ちょっとした気配りでその予防が可能です。こどもを事故から守るのも、我々救急医の大きな仕事と考えています。

Concept コンセプト

◉基本理念　周産期・小児医療の総合施設として、母とこどもの高度専門医療を通じて、親と地域社会と一体になってこどもたちの健やかな成長を目指します。

◉基本方針
1. 患者の権利を尊重した医療の実践
2. 安全・安心と信頼の医療の遂行
3. 高度に専門化されたチーム医療の推進
4. 地域の医療・保健・福祉・教育機関との連携
5. 親とこどもが一体となった治療の推進
6. こどもへの愛とまことに満ちた医療人の育成
7. 医療ボランティアとの協調による患者サービスの向上
8. 継続的な高度専門医療提供のための経営の効率化

編集後記

こども病院に転勤してから早くも1年が過ぎました。広報委員としてげんきカエルの編集に携わることで、こども病院の特色や様々な取り組みを知ることができました。患者さんやご家族、地域の方々にこども病院の活動をもっと知っていただくために、これからも尽力してまいります。（R・H）

委員長：貝藤裕史
副委員長：大津雅秀　松本奈美
委員：深江登志子　黒田隆二
林　卓郎　河本和泉
西澤由美子　井口秀子
寺田朝子　大原晴子
奥田早苗　琉　隼人
時　克志　多々見俊輔
北浦　泰　辛　浩一

本誌に関するご感想・ご希望・ご質問はこちらまで

兵庫県立こども病院
HYOGO PREFECTURAL KOBE CHILDREN'S HOSPITAL
〒650-0047
神戸市中央区港島南町1丁目6-7
TEL. 078-945-7300
FAX. 078-302-1023
http://www.hyogo-kodomo-hosp.com/
e-mail:info_kch@hp.pref.hyogo.jp

02病P2-016A4

げんきカエル No.73

兵庫県立こども病院ニュースレター

令和3年（2021）　4月1日

『げんきガエル音楽隊 ―動画で音楽会！』―工夫をこらしてみんなを応援！

こんにちは！げんきガエル音楽隊です。げんきガエル音楽隊は、こども病院の職員によるこどもたちを応援するボランティア団体です。これまでは楽器が弾ける職員や歌が得意な職員でコンサートを行ってきました。しかし、今は新型コロナウイルス感染症が流行しているために人が集まるイベントの開催が難しくなっています。それでもなんとか治療するこどもたちやご家族を応援したいという職員が多く、去年のクリスマスは演奏動画を作って、病室を訪問し上映する形でイベントを行いました。

兵庫県立こども病院では院内外の新型コロナウイルス感染症の動向に合わせて、厳密に感染対策の変更が行われています。昨年のクリスマスの時期も感染対策のためにイベントに向けての打ち合わせや練習で集まることが難しく、新しい方法が必要でした。開催に向けて、感染対策チームやボランティア担当者をはじめ、関連する部署の職員たちと安全に行える方法を何度も何度も相談し、最終的に参加者の演奏を動画編集で合わせることになりました。感染対策内容の変更の後から本番までわずかな日程しかなかったのですが、動画作成を開始してから1週間であれよあれよと多くの職員が参加し、最終的に140名を超える出演者の動画ができあがりました。

動画を見てくださったこどもたちからは、「面白かった」「知っている先生が出ていて楽しかった」「演奏かっこいい」などの感想をたくさんいただきました。ご家族からも「多くの職員が参加していて感動しました」「コロナの中でも工夫をしてくださり嬉しいです」と喜びの声を数多くいただきました。

今、人と人が距離をとらなくてはならない状況が多くなっています。そのような中でも、こどもたちやご家族に少しでも職員からエールを届けられたら嬉しいです。治療を頑張るみんなをたくさんの職員が病院のあちこちから応援しています。

げんきガエル音楽隊
奥田（6W保育）加藤（7E保育）藤井（心理）香川（麻酔科）
持田（精神科）陸本（GCU看護）小西（7W看護）
前（手術室看護）井口（手術室看護）射手矢（7W看護）

感　謝

N.T.（元患者）

私は、現在、結婚をして娘と息子の２人の子どもの親になることができました。

こども病院は、私にとって生まれた時から切っても切れない大切な場所と言えます。約40年前、生後すぐに心疾患がわかり、こども病院に搬送されました。こども病院での治療や通院は、産まれてすぐの入院・手術、根治手術前のカテーテル検査入院、５歳の時の根治手術、結婚前のカテーテル検査入院、その間、定期的な外来でした。根治手術後、経過は良好で、競争を伴う激しい運動は禁止ではあったものの、普通に生活を送ることができました。

大人になって気になっていたことは、結婚をして子どもを持つことを考えたときに、妊娠・出産が可能かどうかということでした。結婚前のカテーテル検査を受けた時、主治医の城戸先生に相談をしました。城戸先生のお話では、妊娠・出産に対しては「禁止」ではないけれど、妊娠後期から出産までは、体に負担がかかるでしょうということでした。

結婚後、第１子を妊娠してからも、引き続き循環器内科の城戸先生に診ていただいていました。その中で、こども病院の周産期医療センターで、胎児の心エコー検査を受けることができることを知り、念のために受けました。すると、お腹の赤ちゃんにも私と同じ疾患があることがわかりました。胎児心エコー検査をしてくださった循環器内科の先生には、お腹の中にいる状態で調べたことなので、生まれるまでは分からないことがたくさんあること、また、エコーの診断通りであれば、どういう治療や手術を行う可能性があるのかなど、詳しく丁寧に説明をしていただきました。

お腹の赤ちゃんに病気があるかもしれないとわかったとき、ショックと申し訳ない気持ちでいっぱいでしたが、私自身心の準備ができるし、こども病院で出産すれば母子離れることなく診ていただけると思い、前向きに頑張ろうと思いました。その頃、切迫早産であることもわかり、また、私自身の体への負担を考えて、安静入院が始まりました。

妊娠９か月頃に入ってくると、手足の浮腫が出てくるなど、見た目にも心臓への負担が大きくなってきていることがわかりました。私自身の体のことと赤ちゃんの成長具合を考えていただき、37週目に入ったタイミングで帝王切開で出産しました。やはり、生まれてきた娘には、心疾患がありました。娘は生まれた翌日には、循環器病棟に移って治療が始まりました。その後、カテーテル検査にて治療を受け、約１か月間入院をしました。私の産後は、回復には少し時間がかかりましたが、娘より一足先に退院をしました。娘は退院後から12歳になる現在もこども病院への通院は続いていますが、順調に成長してくれています。

娘が生まれた３年後に35週で帝王切開で息子が生まれました。娘の時と同じような妊娠経過をたどりましたが、息子は大きな疾患なく生まれてきてくれて、現在９歳になります。

私自身心疾患がありながら、２人の子どもに恵まれ、元気に子育てできているのは、こども病院で妊娠経過を診てくださった循環器内科の城戸先生、周産期医療センターの先生やお世話になった看護師さん、そして、産後も私自身の体を一番に考えることができるように子育てのサポートをしてくれた、主人や家族のおかげだと感謝しています。子どもたちが小さい頃は、子育てが体力勝負というところもありました。また、ついつい子ども優先になってしまいますが、自分自身の体へも少し耳を傾けてあげて、いつもと違うかなと感じたら、主治医の先生に相談することが大事だと思いました。

私のこれまでの経験は、同じ心疾患を持つ娘に、これから伝えていこうと思っています。私は、現在こども病院での受診は「卒業」し、自宅近くの循環器病センターでお世話になっています。これからは歳を重ねていくにつれ、心疾患以外の事にも気を付けながら、引き続き子どもたちの成長を楽しみに頑張っていきたいと思います。

理化学研究所とジョイントシンポジウムを開催

臨床研究推進室長　長谷川大一郎

当院は、理化学研究所―生命機能科学研究センター（RIKEN Center for Biosystems Dynamics Research：理研BDR）と学術的な交流を進めています。

今回、年の瀬も押し迫る2020年12月26日（土）に兵庫県立こども病院―理研BDRジョイントシンポジウムを開催しました。2016年から互いの交流促進のために行ってきたジョイントシンポジウムも記念すべき第５回目となります。残念ながら新型コロナウイルスの流行下にあることからWeb開催といたしましたが、当院から34名、理研BDRから26名、神戸大学や理研関連外部研究室11名の計71名の方々が参加されました。

理研BDRからは、ヒト器官形成研究チームの髙里実博士、血管形成研究チームのLi Kun Phng博士、ヒト器官形成研究チームの髙橋沙央里研究員から最新の研究成果に関する講演が行われました。こども病院からは泌尿器科 杉多良文先生、心臓血管外科 松久弘典先生、感染症内科　笠井正志先生、産科 平久進也先生が登壇し、今後の研究で解決が期待される様々な臨床的課題についてお話しいただきました。Web開催ではあったものの活発な議論が行われ、活気に満ちたシンポジウムとなりました。

今後も兵庫県立こども病院は、理研BDRと互いにヒトの発生・誕生から成長へのライフサイクルに関わる高度小児医療を担う専門機関と基礎研究機関として学術的な交流を進めていきたいと考えています。